

考古学から見た播磨町の遺跡や出土品など、文化財のよもやま話をお届けします。

播磨町 むかし昔

その十二 資料館下の「竪穴住居」

今年度の最後は大中遺跡の過去の調査から、意外と知られていない発見を紹介しましょう。

昭和59年7月、郷土資料館を建設するために事前発掘（第14次調査）が行われました。資料館を建てるに遺跡が壊れるので、これを記録に残そうと、播磨町教育委員会が発掘したのです。実際の調査は、奈良大学にお願いしています。

発見したのは弥生時代の土坑のほかに、これまで注目されていなかった古墳時代の竪穴住居跡が2棟です。写真のように、1棟は5・1メートル×5・3メートルの平面長方形で4本の柱穴を持っていて、住居跡の中からは、土師器の甕や椀と須恵器の杯などが出土し、この住居の造られた年代は、5世紀後半から末のものと分かります。もう1棟は、1辺が5・2メートルの正方形の住居跡です。北辺の壁際に、朝鮮半島から伝わ

った竈を持つているのが特徴です。年代は、これも住居跡から出土した須恵器・製塩土器などから、5世紀後半頃のものだと判明しました。

そこで、教育委員会はこれらを保存するために資料館の建築工法を変更し、地下にこの遺構を残したのです。資料館の建物が2階建てでなく平屋造りなのも、地下に影響を与えないよう配慮したためです。

古墳時代の竪穴住居を重要と考えたのは、野添に播磨町で唯一確認できる愛宕塚古墳（県指定文化財）が存在するからです。愛宕塚は4世紀末から5世紀初頭に造られた、濠を持ち円筒埴輪を有するこの地域の首長の墓です。町内には、この墓を築いた人たちのムラがあつて当然なのですが、埋蔵文化財地図には古墳時代の集落跡が一つも見当たりません。それは、大中遺跡のように弥生時代のムラに古墳時代のム

【問合せ】 播磨町郷土資料館 学芸員 大平 茂
☎ 079 (435) 5000



第14次調査の「古墳時代竪穴住居跡」

ラが重なっているからかも知れません。でも、詳しく見ると愛宕塚古墳の年代ほど古くはないので、同時期の集落は大中遺跡と同様、比較的標高の高い野添の無量壽院（大寺）付近に埋もれていると捉えました。大中遺跡の住人は、ムラが戦いで滅ぼされた後、野添側に引越し、再びムラが栄えた時に愛宕塚古墳を築いたと考えられています。このように、素晴らしい歴史を持つ播磨町ですが、明らかでないことがまだまだ沢山あります。住宅の新築や建替工事の際に、土器片が見つかったなら、ぜひ郷土資料館へ声をかけてください。



町の人口 2月1日現在 住民基本台帳人口()は前月比

34,736人 (-42人)	男...16,968人 (-31人)	世帯数...14,404世帯 (-17世帯)
	女...17,768人 (-11人)	